

氏 名 王 曉瑞

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1650 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 橘曙覧の研究—漢詩の摂取を中心に—

論文審査委員 主 査 教授 神作 研一
准教授 相田 満
教授 陳 捷
教授 堀 誠 早稲田大学
教授 久保田 啓一 広島大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文「橘曙覧の研究—漢詩の摂取を中心に—」は、幕末の歌人橘(たちばなの)曙覧(あけみ)(以下曙覧と称す)の代表作である『志濃夫廼舎(しのぶのや)歌集』(及び岩波文庫本『橘曙覧全歌集』)収載の拾遺歌)所収の和歌について、漢詩の摂取という問題に焦点を絞って考察したものである。具体的には、彼の和歌の一端が漢詩的表現に依拠していることを実証し、その考察を通して、曙覧和歌の表現の特質を究明することを試みた。

曙覧に対する評価は、かつて佐佐木信綱や正岡子規が称揚して以来、長く曙覧観の基調をなしてきた。しかし、研究の進展にともなって、そうした位置付けを問題視する指摘も出されている。例えば、久保田啓一校注『志濃夫廼舎歌集』「解説」(和歌文学大系 74、明治書院、平成十九年)は、曙覧和歌の評価の基盤を批判して、今後の曙覧研究に確固たる示唆を与えた画期的なものである。

そのような研究の状況を踏まえて、本論文では、新たに、曙覧における漢詩文受容の問題を考察した。その結果、曙覧の中国文学への理解は趣味的な次元にとどまらず、高い識見と深い素養に裏打ちされたものであることが浮かび上がってきた。

曙覧はいったいどのような作品を遺したのか。その内実を総合的に探るために、本論文では、六章に分かって考察を進めた。

第一章「邵雍「首尾吟」との関係をめぐる—曙覧「独楽吟」の表現形式と漢詩受容の可能性—」では、曙覧の「独楽吟」(初句が「楽しみは」で始められ、結句が「時」で結ばれる 52 首の連作詠)が、北宋の邵雍の連作「首尾吟」の表現形式(首句が「堯夫非是愛吟詩」〈堯夫これ詩を吟ずるを愛するにあらず〉で、第二句の句末が「……時」で揃えられたもの)と相似することから、両者の影響関係を考察した。「首尾吟」は、その内容において、自然や田園、生活や家庭の「楽しさ」など身近な楽しみを詠み上げているが、曙覧の「独楽吟」もそこから着想を得たと考えられる。

第二章「蔣士銓及び山陽・旭荘詩との関わり—曙覧詠寒和歌考—」では、「寒僕」「寒婢」など、「寒」の字を冠した歌題を持つ曙覧の連作が、清代の詩人蔣士銓の「消寒雜詠、王蔗村太守に和す十首」(原漢文)及びその影響を受けた日本の漢詩人頼山陽の「四寒詠」、広瀬旭荘の「寒樵」とも深い関係があることを論じた。併せて「妓院雪」「俠家雪」「書中乾胡蝶」など、和歌においては必ずしも一般的でない曙覧詠の歌題と、旭荘や菅茶山の詩題との関係も視野に入れて、曙覧和歌の特質を考察した。

第三章「漢詩文摂取の概観および連作「擣衣」」では、漢詩文との関係性が濃いと見られる曙覧歌 104 首について、その摂取の様相を具体的に分析した。とりわけ「擣衣」は、杜甫の詩の影響が顕著に見られることが判明した。

第四章「正岡子規の曙覧観を見直す—漢画詠の評価を中心に—」は、子規自筆の「橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集手抄」(国立国会図書館蔵の子規の「和歌手抄」所収)に収められる 211 首について、子規による抄出の状況を検討した。その結果、子規は、曙覧の漢画の画賛歌に対して、高い関心を持っていたことを推論した。また、子規は曙覧詠に、新奇な歌題、題材を詠んだものや、日常身边や四季折々の風景を活写したもの、そして長文の詞書を持つものなどに特に関心を持っていたことも判明した。このような傾向は、子規の作風と無縁ではないといえる。

第五章「係助詞「ぞ」と動詞表現に見る曙覧和歌の特異性」では、『志濃夫廼舎歌集』に

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

15 例見られる係り結びの表現について考察した。中でも、例えば「河隈の巖に根はふ竹と竹なびきぞ回る水を狭めて」のように、「動詞の連用形」＋「ぞ」＋「動詞の連体形」というスタイルをとった係り結び表現は、古典和歌においては珍しく、曙覧の和歌表現の特徴の一つと認めることができる。

第六章「曙覧の文事的一端―橘曙覧記念文学館蔵の橘曙覧遺墨について―」では、曙覧の遺墨（和歌幅と漢詩幅および書簡）を取り上げて、その書学のありようについて考察した。曙覧は四十三歳以後、顔真卿の楷書、懷素の草書などの書体を学んで、書の工夫をしたことが確認できた。特に漢詩幅「土牀爐足りて云々」においては、懷素「千字文」の影響が見られる一方、雄渾闊達な大ぶりの書風が特徴的であると考えた。

以上、本論文では、曙覧和歌における漢詩摂取という問題を考察し、曙覧詠の基盤が、杜甫、邵雍など唐宋の詩にとどまらず、蔣士銓などの清詩や江戸後期の日本漢詩人の作品まで及んでいたことを新たに指摘した。併せて、正岡子規を通して見た曙覧詠の特徴や、係り結びに見る表現の特質、さらには書学のありようについても考察し、曙覧研究を総合的に果たすよう心がけた。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

橘曙覧（1812－68）は、幕末に越前国福井に生きた地方歌人であり、近代に入ってから正岡子規によって〈発見〉された人物である。

本論文は、その曙覧の和歌における漢詩受容の問題を軸として、曙覧研究を強力に推進したものである。近年、近世和歌の研究は、堂上（天皇及び公家）を中心とする歌壇史的研究と、地下（宮中に出仕しない人びとの総称で武家や僧侶・神官・商人など）の伝記的研究を中心に進展著しいものがあるが、本論文はそうした研究動向に目配りをした上で、丹念に、曙覧和歌の発想の源に接近し、表現の特性を分析しようと努めている。

論文の副題にも謳われているように、本論文の特徴は、従来ほとんど追究されることのなかった〈曙覧と漢詩〉という大きなテーマに挑んだことにある。いま要点をかいつまんで、その全体を具体的に示す。

第一章「邵雍「首尾吟」との関係めぐって—曙覧「独楽吟」の表現形式と漢詩受容の可能性—」は、北宋の邵雍「首尾吟」（『伊川擊壤集』所収）と曙覧「独楽吟」の表現形式の類似を基に、その影響を読み取ろうとしたもの。先行論文（前川幸雄「橘曙覧と邵雍と—「独楽吟」と「首尾吟」の関係について—」『福井大学国語国文学』50号、2011年3月）を批判的に踏まえつつ、曙覧が自然や田園、生活や家庭の「楽しみ」を詠じたその背景に、邵雍の存在があったことを主張する。曙覧研究に、従来のそれには乏しかった和漢比較研究の視点を持ち込んだ意義は大きいと言わねばならない。

続く第二章「蒋士銓及び山陽・旭莊詩との関わり—曙覧詠寒和歌考—」は、曙覧の、「寒僕」「寒婢」「寒猫」などのような「寒」の字を冠した歌題が、蒋士銓の「十寒詠」を踏まえて詠まれた頼山陽の「四寒詠」（『山陽詩鈔』所収）と広瀬旭莊「銷寒十詠」（『梅墩詩鈔』二編所収）に深く関わっていることを指摘したもの。これらの題が幕末期に流布した類題集に見出せないこと、山陽や旭莊の漢詩文が幕末の文人に大きな影響を与えたこと、曙覧には山陽の「高山彦九郎伝」に依拠した和歌が遺されていること等々を考慮すれば、山陽・旭莊両者の詩文集が曙覧の座右の書であった可能性は高く、この指摘は大きな説得力を有している。曙覧の着想の淵源を解明し、曙覧の歌題を初めて研究対象に据えた、意欲的な論考である。

第三章「漢詩文撰取の概観および連作「擣衣」」は、本論文の基盤をなす論説として重要なもの。手際よくなされた整理は、ここからさらに発展的な問題の広がりや予想させて興味深い。「擣衣」題を例として、漢詩では普遍的に見出される「辺境に勤務する夫を思う妻の思い」という設定が和歌では受容されなかったのに対して、曙覧の和歌は漢詩を踏まえていることが指摘される。これは「漢詩の撰取」という観点があって初めて可能になることであり、さらに、曙覧の和歌中に伝統的な和歌の範疇に収まらない作品があること理由を考える上で、極めて示唆に富むと断じられる。

第四章「正岡子規の曙覧観を見直す—漢画詠の評価を中心に—」は、曙覧の画賛歌に対する子規の関心と評価を批判的に検証したもの。国立国会図書館に所蔵される子規の「橘曙覧遺稿 志濃夫廼舎歌集手抄」を材として、近代における曙覧評価に大きな影響を与えた子規の曙覧観に揺さぶりをかけることに成功している。

第五章「係助詞「ぞ」と動詞表現に見る曙覧和歌の特異性」は、曙覧の和歌に頻出する係助詞「ぞ」に着目して、その表現を分析したもの。国語学的な観点に基づく考察は独創的で、今後の発展が感じられた。

(Separate Form 3)

最後の第六章「曙覧の文事の一端―橘曙覧記念文学館蔵の橘曙覧遺墨について―」は、橘曙覧記念文学館に所蔵される曙覧の遺墨を俎上に載せて、その書風の変遷(真→行→草)を実証的に示したもの。傍証のために取り上げた曙覧の書翰によって、潤筆料で生計を立てていた彼の生活の一端が示され、しかも文具には金を惜しまなかった人物像が明らかにされたことは、彼の清貧な歌風と生活実態とが乖離していた可能性を窺わせる。小さなことだが、興味深い指摘と見るべきである。

如上、特に第一章から第三章までの三つの章は大きな達成を示して興味深く、本論文の基軸を成している。他方、第四章から第六章までの三つの章は曙覧和歌の実態を側面から解明して、前半の諸章を補完する役割を果たしている。

本論文によって、曙覧研究者は、彼の和歌を読むにあたって、同時代に流行した漢詩をも典拠として意識する必要があることを改めて知らされた。ただし、王氏の所論にも、邵雍「首尾吟」と「独楽吟」との関係や、題画詠と強調表現の結びつきなど、さらなる追究を要する部分がある。今後、本論文で提起された問題を全面的に解決する方向で諸家の研究が進められることを期待し、その出発点を築いた王氏の業績を評価したい。

総じて本論文は、曙覧研究に新たな風を持ち込んだ意欲作であり、本審査委員会は、本論文が博士論文として十分な内容を具備していると判断し、合格と認めるものである。